

パリッタ儀礼に見られる deva の考察

亀 山 健 志

はじめに

今回は上座仏教で一般的に行なわれるパリッタ儀礼にみられる deva (神) をパリッタのテキストのなかにおいて考察したい。また同じ現代におけるヒンドゥー教の pūjā 儀礼との比較によりその儀礼の構造的特徴を導き出してみたいと思う。

パリッタ儀礼とは

パリッタ儀礼とは paritta (√ pari+tr+ana 転じる+渡す) すなわち禍いなどから会わない様にするもの、何かからの庇護を要求するものという意味のいくつかの經典を比丘が誦呪する儀礼である¹⁾。在家信者はその誦呪に何らかのメリットを期待し、その目的が在家信者から僧団への布施の動機となる。

パリッタ經典中にみられる deva

これまでの事例研究においてどのような事例においてもパリッタ儀礼の最初には invocation of deva と呼ばれる神々の招聘文句が唱えられることが確認できる。

samantā cakkavālesu atra āgacchantu devatā saddhammaṃ munirājassa suṇantu saggamokkha-daṃ dhammasavana kālo ayaṃ bhadaṇā. (訳 あまねき鉄圀山にいる諸神よ、このところに来れ。上天解脱をあたうるムニ王の正法を諦聴せよ。諸大徳よ、聞法の時である。)²⁾

この文句によって儀礼の場に様々な神々が呼び出されることが確認できる。次に比丘によって複数のパリッタ護呪が誦呪される。伝統的なパリッタの經典数は 29 編とされるがこれらすべての考察は別の機会に譲るとして、deva の考察として特に取りあげるべきものは、mahāmaṅgalasutta, ratanasutta, karaṇīyamettasutta, dhammacakkappavattanasutta, mahāsamayasutta であろう。これらのパリッタは仏教における deva の性格を垣間みることができる³⁾。

・大吉祥經 mahāmaṅgalasutta

この経は釈尊が舍衛城の祇樹給孤独園に住していた時、夜半を過ぎた頃に一人の神が釈尊の前に現れることから始まる。この神は釈尊に maṅgala 吉祥を呼ぶ言葉語る様に要求する。その要求のなかには

bahūdevā manussā ca maṅgalāni acintayum ākañhhamānā sotthānaṃ brūhi maṅgalamuttamaṃ.
(訳 多くの諸天、諸人類は、もろもろの福祉を望みつつ、もろもろの吉祥を思念する。我に最上の吉祥を語りたまえ。) ⁴⁾

とあり、神々が釈尊の説法を聞くためにわざわざ訪れている様子が説かれている。これに対して最上の吉祥を釈尊は説法するが、その対象は神々に対して行なわれる。神々に対する説法が経文の中心となる。

・宝経 ratanasutta

ヴェーサーリに飢饉が訪れた際に、そこに住むリッチャヴィ族が王舎城に至りて、釈尊をヴェーサーリに招き、災禍を取り除くために説かれた経典が宝経とされる。ここで釈尊は

yānīdha bhūtāni samāgatāni bhumāni vā yāni va antalikkhe sabbe va bhūtā sumanā bhavantu athopi sakkacca suṇantu bhāsitaṃ tasmā hi bhūtā nisāmetha sabbe mettaṃ karotha mānusiya pajāya divā ca ratto ca haranti ye baliṃ tasmā hi ne rakkhatha appamattā.

(訳 ここに集いし、もろもろの鬼神よ、地上にあっても、空中にあっても、一切の鬼神は幸福であれ。また恭しく諸説を聞け。一切の諸鬼神よ傾聴せよ、人類に対して慈しみを行ないたまえ、昼も、夜も供物を運ぶ彼らを、不放逸にして護れ。) ⁵⁾

と述べ、この経典も人類ではなく、鬼神に対しての説法であることが解る。

・慈経 karaṇīyamettasutta

雪山(ヒマラヤ)の麓で修行する比丘に諸天や鬼神が現れて、比丘の修行の邪魔をする。釈尊はそのような比丘にこの慈経を説き、これを護呪として伝授したとされる。この経典の中に直接 deva は現れないが、注釈書にはこのような因縁を残している ⁶⁾。

以上の3つの経典はパリッタ儀礼の最もポピュラーな経典としてほとんどの儀礼でセットにして読まれている。

・転法輪経 dhammacakkappavattanasutta

仏教を信仰するものにとって、転法輪経は最も重要である経の一つと言っても過言ではないだろう。特に上座仏教においては彼らが伝承した経のなかでも、最も権威あるものであるといえる ⁷⁾。前半部分は四聖諦、八正道といった鹿野園での説法が中心となるが、後半部分はそれらの説法を聞いた神々がその内容を賛嘆

する場面である。

・大会経 mahāsamayasutta

そしてパリッタと deva という観点で考察するのに最も重要な位置にある経典がこの大会経であろう。この経典には上座仏教における deva の在り方をよく表している。

釈尊はカピラヴァットゥスの大園林に 500 人の阿羅漢に達した比丘と共に住していた。そこへ十方世界より数多の諸天が釈尊と比丘衆を見るためにやってくる。諸天は釈尊に礼拝し、その悟りに達した阿羅漢を賛嘆する。そこで釈尊は比丘に対して次のように言う。

ācikkhissāmi bhikkhave devakāyānaṃ nāmāni, kittayissāmi bhikkhave devakāyānaṃ nāmāni, desissāmi bhikkhave devakāyānaṃ nāmāni, taṃ suṇātha sādhu kaṃ manasi karotha bhāsis-sāmiti. (訳 比丘らよ、汝らの為に諸天族の名前を告げよう。汝らの為に諸天族の名前を宣言しよう。汝らの為に諸天族の名前を教示しよう。それをよく聴き臆念せよ。我、汝らに告げる。) ⁸⁾

以降は釈尊の偈となるが、その内容は諸天の説明となる。そこで釈尊は繰り返

し devakāyā abhikkantā te vijānātha bhikkhavo. (訳 天族は近づき来たり、比丘等よ、彼らをよく識知せよ。)

と比丘に deva に関する知識の促進をさせる。その羅列は夜叉から始まって、四天王、乾達婆、鳩槃荼、龍、阿修羅、六十種の天族、梵天と仏教における deva を網羅する。そして比丘にこれらをよく識知するように説かれる。経典の最後には比丘のところに集まった諸天をみて、魔族が攻撃をしてくるが、愛欲を離れた阿羅漢たちはことごとくこれを退散させ、集まった諸天とともに喜びあうというものである。

複数のパリッタ読呪が終了するとその儀礼を行なったことで得られる功德を回向するためのいくつかの偈が読まれる。これをアヌモーダナと呼ぶが、次のような偈文を発見することができる。

dukkhappattā ca niddukkā bhayappattā ca nibbhayā sokappattā ca nissokā hontu sabbepi pānino ettāvata ca amhehi sambhataṃ puññasampadaṃ sabbe devānūmodantu sabbasampattissiddhiyā dānaṃ dadantu saddhāya sīlaṃ rakkhantu sabbadā bhāvanābhiratā hontu gacchantu devatāgatā sabbe buddhā balappattā paccekānaṃ yaṃ balaṃ arahantānaṃ te jena pakkhaṃ bandhāmi sab-

baso. ākāsaṭṭhā ca bhummaṭṭhā devā nāgā mahiddhikā, puññaṃ taṃ anumoditvā ciraṃ rakkhantu sāsanam. (訳 苦しむ人は苦より逃れ、怖れる人は怖れから逃れ、憂う人は憂より逃れ、すべての生類もまたこのようにありますように、このように積んだ我々の徳によって、すべての神々が随喜しますように、信によって布施をなすべし、常に戒を保つべし、修習を楽しむべし、神である者たちは行くべし、すべての仏は威力を得たり、独覚も威力を得たり、阿羅漢も威力を得たり、彼らの力によって我は護を結ぶ、天にとどまり、地に住する大威力ある天と龍はこの功德を随喜して、永く教法を守護すべし。) ⁹⁾

このアヌモーダナは供物によって随喜された神々に帰ってもらうという性格をもつものである。釈尊の説法を聞く為に集まった神々は、その対象が神々に対して読まれるとされる宝経や大吉祥経などを聞き、また必ず儀礼の前に準備される線香や蠟燭、献花などの供物によってもてなされ、仏法の守護を要求されるものである。パリッタ儀礼にはこのように神々を儀礼の場に招聘して、供物を捧げ、法を聴いてもらい、元の場所に帰ってもらうという構造を持つ。

pūjā との構造的比較

以上の考察を踏まえて、パリッタ儀礼のもつ構造的な性格を現代のヒンドゥー教における pūjā の事例研究と比較対照すると、その儀礼的な源泉が似ていることが解る。ここではヒンドゥー教儀礼の代表的研究書である「Pūjā and Saṃskāra」より ṣoḍaśa-upacāra pūjā (十六段階の供養) をその対象とし、簡単に儀礼の次第を紹介したい ¹⁰⁾。この十六段階の供養では第一の段階で invocation to goddess として神々が招聘される。次に坐や献花、お香、甘露などが順次提供されて神々がもてなされる。さらに牛乳や蜂蜜などで神々はその身体を洗われる。これは abhiseka (灌頂) と呼ばれ、同時にリグ・ヴェーダやヤジュル・ヴェーダの内容が読呪される。さらにいくつかの供物が捧げられ、最後に visarjana (送り出し) として礼拝とマントラの読呪が行なわれる。

パリッタ儀礼においてもまず儀礼の最初には atra āgacchantu devatā (ここに神々よ来れ) として儀礼の場に deva が招聘される。そして本論で確認したようにパリッタの中には、諸天や鬼神に関連した宝経や大吉祥経、慈経などが必ず読まれ、中には転法輪経や大会経のように具体的な deva の姿や名前を挙げた經典もパリッタとして認められている。そしてアヌモーダナとして読まれる経文には devatāgātā (神であるもの) は gacchantu (行きなさい) とある。このように考えるとパリッタ儀礼は deva に対する一種の供養 (pūjā) であるという側面をもつことが明確になる。

その目的は仏法の守護であり、また在家信者の現世利益の成就でもある。

結論

インドの宗教には3つの大きな伝統が存在すると言することができる。すなわち、智慧の伝統、行為の伝統、帰依の伝統である¹¹⁾。仏教が様々な多様化する過程においてもこの伝統から外れてしまうということはなかったといえよう。上座仏教では周知のように、智慧の伝統に重点をおいて教義が完成しているといえる。得度受戒を経て戒律の中に生活する態度は明らかに智慧を重視する傾向である。しかしながら残りの2つの伝統が全く消滅しているわけではない。今回考察してきたように、パリッタ儀礼のなかには明らかにインドにおける行為の伝統をその源泉としたものもオーソライズされていることが確認できるのである。パリッタ儀礼にはこのような性格の一面を有していると言することができる。今後も上座仏教における儀礼の考察を通じて体系的な仏教の理解に精進したいと思う。

-
- 1) Lily de Silve : Paritta -A historical and religious study of the Buddhist Ceremony for Peace and Prosperity in Sri Lanka (Spolia Zeylanica, Vol. 36 Part 1) National Museums, Sri Lanka, 1981, introduction p. 3
 - 2) 高橋壮「上座仏教の存在形態 (五) ピリット儀礼」(『現代スリランカの上座仏教』第五章 山喜房 1986) p. 235, 236
 - 3) G. Ariyapala Perera: Buddhist Paritta Chanting Ritual: a comparative study of buddhist benedictory ritual, Buddhist Cultural Center, Sri Lanka, 2000 p. 117f
 - 4) 翻訳は南伝大蔵經二十四卷 pp. 96-100 を参照した。
 - 5) 翻訳は南伝大蔵經二十四卷 pp. 81-87 を参照した。
 - 6) 南伝大蔵經二十四卷 p. 55
 - 7) 亀山健志「転法輪經についての研究」(『印度学仏教学研究』51-2 号 2003 pp. 95-97)
 - 8) 高橋 1986 p. 240 には大会經をスリランカの神祇信仰との関係として指摘している。
 - 9) 高橋 1986 p. 212 を参照とした。ここでは devatāgātā を「天にいたりしもの」と訳しているが、本論では「神であるもの (神の状態にあるもの)」のほうが適切であると思う。
 - 10) Musashi Tachikawa, Shoun Hino, Lalita Deodhar, Pūjā & Saṃskāra, Motilal Banarsidass Publishers, INDIA, 2001
 - 11) この三つの伝統を日本の仏教宗派に例えるならば、智慧の伝統は曹洞宗、行為の伝統は真言宗、帰依の伝統は浄土真宗ということができよう。

〈キーワード〉 paritta, deva, pūjā, 上座仏教, 儀礼, パリッタ儀礼

(愛知学院大学研究員)

scription is that it *does* refer, though not directly, to Amida-buddha — according to his opinion, neither Amitābha nor Amitāyus but Amṛda (Amṛta) — himself.

185. On the *Samādhisambhāraparivarta* of Bodhibhadra

Kaie MOCHIZUKI

There are three texts named *Samādhisambhāraparivarta* in the Mādhyamika section of the Tibetan Tanjur. The largest is written by Bodhibhadra, the second is by Kṛṣṇapāda and the last smallest is by Dīpaṃkaraśrījñāna.

In the text of Bodhibhadra (= SSP), he says in its beginning that there are nine accumulations for meditation, namely: 1) renunciation, 2) preparation, 3) avoidance, 4) suppression of anxiety, 5) dissatisfaction with the world, 6) mindfulness of merits, 7) efforts, 8) integrating, 9) means of staying.

Dīpaṃkaraśrījñāna, who is said to be a student of the Bodhibhadra, refers to SSP in his texts many times. Comparing the contents of *Bodhimārgadīpa-panjikā* with SSP, it will be clear that Dīpaṃkaraśrījñāna wrote the section of meditation in the *Bodhipathapradīpa* and its self-commentary on the basis of SSP.

186. “Deva” in the Paritta Ritual

Takeshi KAMEYAMA

In the paritta ritual performed in contemporary Theravada Buddhism, we can recognize a number of devas, who are to be found in the canonical Pāli literature. For example, the monks who are responsible for the paritta ritual offer an invocation to devas, saying “atra āgacchantu devatā (gods, come here!)”.

The main paritta scriptures are the *Maṅgalasutta*, *Ratanasutta*, *Kalaṇiyamettasutta*, *Dhammacakkappavattanasutta*, and *Mahāsamayasutta*, within which we find influences on devas reflected repeatedly. At the end of the paritta ritual, monks say “gacchantu devatāgatā (Divine ones, go away!)”.

In this paritta ritual, monks invite many devas to the place of the ritual, and offer some words that include a request to devas. At the end of the ritual, monks cause the devas to return. This paritta ritual resembles rituals of Hindu pūjā in structure.

187. Some Problems of the Bodhisatta's Birth in the *Nikāya*

Shin AMANO

The purpose of this paper is to point out that the description of the Bodhisatta's birth scene including "the gāthā at birth" in the *Nikāya* is that of the former Buddha's birth scene. In the *Nikāya*, the Bodhisatta's birth scene of this type is contained in the *Acchariyabbhutadhammasutta* (MN. 123, MN. III pp.118-124. = *Acch*). It is similar to the Bodhisatta Vipassin's birth scene in the *Mahāpadānasuttanta* (DN. 14, DN.II pp.1-54. = *MAP*). If we compare the two birth scenes more minutely, we notice that the introductory portion in *Acch* which contains "the conversation about the former Buddhas among the bhikkhus" is related to the description of "the characteristics of the former Buddhas" in *MAP*. In addition, a parallel description of the *Acch* introduction is found in *MAP*, and its Sanskrit and Chinese versions, but the location of the parallel description is different. From this, we can comprehend that the introduction in *Acch* was originally the introduction to "the characteristics of the former Buddhas". Thus, it can be said that the Bodhisatta's birth scene in *Acch* is that of the former Buddha's in *MAP*, and that the Bodhisatta's birth scene including "the gāthā at birth" had been handed down as the former Buddha's birth scene in the *Nikāya*.

188. On the Interpretation of *svabhāva* by Middle Period Mādhyamikas

Mayumi NASU

The term *niḥsvabhāvavādin* was represented by *ngo bo nyid med par smra ba* and *rang bzhin med par smra ba* in later Tibetan Buddhism. The former is the Svātantrikas and the latter is the Prāsaṅgikas. In Bhāviveka's *Prajñ-*